
小さなボディガード

紫藤さやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さなボディーガード

【Nコード】

N42090

【作者名】

紫藤さやか

【あらすじ】

マフィアのボスの用心棒をしていたパパが殉職してしまった。これからは、私がパパのあとを継いでボスの用心棒になる！ミシエルの就活奮闘記。完結しました。

小さな誓 1

小さな誓 1

霧雨で視界が悪く、車の外は灰色に沈んでいる。

「ボス、やはり行くのはやめた方がいいのでは・・・？ まだ、連中はあきらめていないでしょう。また、命を狙われますよ」

車を運転していたセルジオがミラー越しに私を見ていった。

セルジオのいうことはもつともだ。私は命を狙われている。仕事柄、敵が多いのだ。もとは伝統ある犯罪組織の秘密結社、早い話マフィアだったが、昨今の事情で組織の維持が難しくなっている。組織を変えるのはそう簡単なことではなく、様々な軋轢を生む。強力なファミリーの要であった父を殺された。今の標的が自分であることは承知している・・・。

そもそも今向かっているのも、私の用心棒二人の葬儀なのだ。二人はこの間の抗争中、私をかばって死んだ。あまりに大きな痛手だった。行く先々、死、ばかりだ。

死んだのはアンナとアキラだ。

アンナはもとフリーの殺し屋で、私の側近であるロレンツイオと結婚し、私専属の殺し屋兼用心棒となった。まあ、そうなるまでにかなりいろいろあったのだが・・・。

アキラは私の用心棒で、私が子供のころから世話になっていた。妻に先立たれ、一人娘がいたはずだ。アキラの父親も私の父の用心棒だった。

こんな状況で葬儀に出向くなど、連中に殺してくださいといっているようなものですよ、とセルジオはいう。それほどにまで、私達をとりまく状況は悪かった。報復どころの話ではない。私が死ねば、それで全てが終わる。伝統あるファミリーの消滅。だが、あの二人の葬儀にだけは、どうしても参列したかったのだ。セルジオは渋い顔をしたが、他の護衛の車をつけ、葬儀の途中から出席し、途中で抜けることでなんとか同意した。

霧雨の向こうにロレンツイオが沈黙していた。

渋く整った面、がっしりとした長身の体はそのままだが、今日のロレンツイオは無表情で小さくみえた。冷徹で頭が切れる男が唯一不器用に恋をし、一緒になった女の葬儀だ。悲しくないはずがないだが、ロレンツイオは最初からこうなることをわかっていたような気もする。

アンナはいつか死んでしまうことを予感させる女だった。そういう類の人間は、確かに存在する。アンナにはいつも死の匂いが立ち込め、それが逆に彼女の生を照らし魅力的にしていた。いつも刺激を求め、死と隣り合わせでなければ生きられない、そういう女。

ロレンツイオは私に気づくと驚いて私の周りを見渡した。護衛の姿を確認し、私の周りに危険がないか確認しているのがわかる。もう無意識の習慣なのだろう。そのあとで、目礼し、顔を伏せた。

もう一つ、小さな影があった。アキラの娘、ミシエルだろう。たしか、12歳ぐらいだった。もつと小さいころ会っている。ミシエルは毅然とした表情で、柩が埋められる様子を見ていた。隣の男が傘をさしかけてやってはいるが、ミシエルの小さな肩にも顔にも柔らかなような黒髪にも霧雨が絶え間なくかかり、ぐっしりと重く濡らしている。ミシエルは孤児になってしまったはずだ。私はなんと

いって声をかけていいかわからないまま、ミシエルに近づいた。

ミシエルの肩にそつと手をおいた。

ミシエルが驚いて、振り向いた。澄んだ翡翠色の瞳が見開かれる。

泣かれるかと思った。わたしのパパを返して、と。
だが、その後の彼女の行動は予想外のものだった。

「父に代わって、これからは私がボスをお守りします」

彼女は私に跪き、こういったのだ。

騎士のように。

小さな誓 2

孤児となってしまうたミシエルを引き取るつもりでいたが、ロレンツイオが引き取ると言い出した。もともとミシエル・アキラ親子、ロレンツイオ・アンナ夫婦は家族ぐるみの付き合いをしており、アンナは母のいないミシエルを可愛がっていたという。アンナを失ったロレンツイオにとってミシエルの存在は癒しになるのかもしれないし、ミシエルにとってもよく知っているロレンツイオと一緒にいる方がいいのかもしれない。

ミシエルには家庭教師を今までどおりつけ、アキラの家に通っていた家政婦のマリアを引き続きロレンツイオが雇うことになり、ミシエルはロレンツイオの家に落ち着いた。どこにいても危険が無いわけではないが、私の手元に置くよりはマシだろう。

ミシエルの小さな濡れそぼった肩、ミシエルの真剣なまなざし、泣くまいとした毅然とした表情、そしてあの言葉。何もかもが愛おしく、手元において大切に守ってやりたいような衝動に駆られたが、そもそもミシエルから最愛の父を奪った原因は私にある。ミシエルがロレンツイオの元にいたいというなら、それでいいだろう。

しばらくしてロレンツイオから仰天することを聞かされた。ミシエルが真剣にコロシを教えてほしい、とねだったという。12歳の娘のことではない。ロレンツイオも一通り銃器を扱うことはできるし、射撃の腕前もなかなかのものだ。最近は頭脳労働を中心として行動派のアンナとタッグを組み、活動することが多かったが・・・。

父に代わって、ボスをお守りします、というのは本気らしい。

ミシエルは大人びてはいるが、純真さが抜けず、一途なところがある。一度思い込むと案外やっかいな娘かもしれない。そもそもアキラはつかみどころのない変人だった。一人娘のミシエルにどんな教育をしていたか、わかったものではない。コロシを教えてほしいなど・・・！ ロレンツィオの元にやったのは間違いだったかもしれない。

ミシエルを「まっとうな子」に育て、カタギの世界に送り出してやりたい、と、この私はいつしか願うようになってしまった。アナのような女にはなってほしくない。そして、それはそれは困難な道のりだったのだ・・・。

ミシエルの願い 1

パパを超える用心棒になって、ボスを守らなければならない。
おじいちゃんも前代ボスの用心棒だったそう。豪快な人で、食べ過ぎ、飲みすぎ、遊びすぎで早く亡くなったそうだけれど。

私も将来、パパやアンナみたいになるって決めていた。でもどっちかっていうと、パパよりアンナみたいにかっこよくなりたい。

パパはいつもいつてた。ミシエル、俺を超える男になれ！と。
うん。パパを超える男になって、立派な用心棒になる。

パパはいつもいつてた。ボスはまだ若いけれど、見どころのある立派な男だ、と。けれど、前代のボスに比べるとまだ軟弱で優しすぎるところがある、とも。見どころのある立派な男とか、よくわからないけれど、ボスが優しい男だということは覚えている。ママが死んじゃったとき、ずっと私の手を握っていてくれた。ママのことをすごい美人で優しい人だっけってくれた。

ボスは今が一番大変なときだから、しっかり守ってやらないといけない。それに、その価値のある男だ、とパパはいつていた。だから、まだ軟弱で優しすぎるボスを私が守らなければならない。きつと相当軟弱なのだろう。パパとアンナが命を張って守らなければ生きていけないほど。

でも、どうすれば、ボスを守れるのだろうか？　パパは強かった。体はロレンツイオに比べるとあんまり大きくなかったけど、武道は空手、剣道、柔道。射撃も上手い。その中でパパから習ったことのあるのは射撃だけだ。もっと、いろいろ教えてもらっておけばよかった。こんなに早く軟弱なボスを守らなければならなくなるなんて、

思ってもみなかった。

なんだかやっぱり、涙がいっぱい出てくる。

泣かない、って決めていたのに。

パパを超える男になるって約束したのに。

やっぱり、ボスは軟弱そうだった。パパのお葬式的时候会ったけど、私を見たとき、泣きそうな顔をしていたのだ。きっと、パパもアンナも死んじゃってすごく不安なんだと思う。とってもハンサムだけど、泣きそうなボスの顔を見て誓った。絶対、守るって。

ミシエルの願い 2

「ロレンツイオ、お願いがあるの。射撃を教えてほしいの」

夕食後、私は切り出した。パパがロレンツイオと射撃の試合をして、ロレンツイオが勝ったことがあるといていた。

「ミシエル、射撃なんて習ってどうするつもりだ？」

ロレンツイオは驚いた顔でいう。ロレンツイオが驚く方が驚きだ。

「そりゃ、射撃ができればいろいろ役に立つでしょう？ コロシとか！」

ロレンツイオはなぜか絶句して、私の頭をわしわしと撫で、部屋を出て行ってしまった。

すぐに射撃を教えてもらえると思っていたのに。

この家の地下にはアンナが作らせた射撃の練習場がある。

しばらくすると、ロレンツイオはもどってきて、雑誌をくれた。

「これでも読んでなさい。コロシなんて物騒な言葉、女の子が使ってはいけない。」

なんて、とんちんかなことをいう。

アンナだって、四十四口径マグナム持ってたじゃん！！

オトナの女ならいいの？ 男ならいいの？

「女の子じゃないもん。男になる。パパだって、男になれ！ って、いったもん」

とりあえず、パパのいつていたパパを超える男を目指そう。女だけだ。

「男になれ？ アキラがそんなこといったのか？ ……わけがわからん。それより女向けの雑誌でも・・・」

ロレンツイオは自分がもってきた雑誌に何気なく目をおとした。アンナが買ってきてそのままになっていた雑誌だ。

派手なロゴが並ぶ女性誌。これでアナタもオトコをトリコにできる！

「いや、これは、まだ読まなくていい」

ロレンツイオはなぜかあわててまた雑誌を回収して出て行ってしまった。

ロレンツイオ、わけわかんない。

それより、早く射撃教えて。早くしないと、あの軟弱ボス、守れないし！

？

とりあえず、ロレンツイオは射撃を教えることになった。

コロシのためではなく、単なる一般教養のスポーツとして、というわけのわからない前置きをして。

パパに基本的な手ほどきは受けている。パパからは才能がある、とおだてられたこともある。私はおだてられると、木にのぼるタイプだ。

私は真剣に取り組んだ。この手に軟弱なボスの命がかかっている。そう思うと手が震えた。手が震えたのに、私が撃った弾は100発99中だった。ロレンツイオはうなづいて、私を天才だといった。

そもそも基準がわからないので、天才かどうかはわからないが、軟弱ボスを守るためには、腕がいいに越したことはない。

得意なのはハンドガン（拳銃）よりもライフルだ。動いている標的を撃つのも得意だ。ただ、ほとんどの銃が私には大きすぎるし、重すぎるので苦勞する。パパとアンナのコレクションの中から小さくて、軽くて、銃身が長めのやつを選ぶ。

ロレンツイオがいうには、私は動態視力がいいらしい。

子供の頃、パパが指ではじいたアーモンドチョコを口でキャッチしていたのがよかったのだろうか。もつともそれは、私がアーモンドチョコをのどに詰まらせ、死にかけたのをきっかけにママに絶対禁止令を食らい、グリーン豆に変わったが。

動く標的を撃てるということは、アンナみたいに敵をやつつけることができるということだ。一歩目標に近づいた。

でも、うかうかしてられない。今日も軟弱ボスは死にかけているかもしれないだから。はやくボスを護りたい。

ボスの思い 1

「ボス！！ ご無事でしたか？」

てけてけとかけてくる少女に苦笑する。

ロレンツイオがミシエルを連れてきたのだ。

「最近、身の危険は？ 安心してください。ボスの命を狙う邪魔者は消して差し上げます！ 射撃、上達したんです！」

ああ、かわいいミシエル。なぜ、そんな物騒なことばかり言う・・・。

ミシエルは満面の笑みで私を見上げる。

私は仕方なく、かがんでミシエルの頭をなでてやる。ミシエルは私をじっと見ていたが、何を思ったのか、

「大丈夫ですよ、私がついてますから」

と、逆に私を慰めるように、私の頭をおずおずとなでた。

「私、早く、パパ・・・父みたいになります。あと、アンナみたいに」

ミシエルはアキラやアンナに憧れているらしいと、ロレンツイオからきいている。

「・・・ミシエルが危険なことをする必要はない。用心棒は他にちゃんといえるからね。ああ、もちろんアキラの代わりになる人はいないけどね」

ミシエルの小さな顔を両手ではさみ、言い聞かせたが、ミシエルはきょとんとした顔をしていた。

だめだ、絶対にわかっていない顔だ。

「だから、私がアキラの代わりに・・・」

私はミシエルの小さなおでこに自分のおでこを合わせた。

「ミシエルに危険な目にあってほしくないのだよ？」

頼む、わかってくれ。

「でも、それって、ボスはやっぱ危険ってことでしょ？ だから、私が守ってあげるって、いつてるのに・・・！」

ミシエルのかわいい瞳は涙がもりあがってきている。女を泣かせたことはあるが、子供を泣かせるつもりはない。

「・・・わかった。わかったから。」

全く困った娘だ。私はため息をつく、ミシエルの頭に軽く口づけ、ミシエルを離れた。全くお手上げだ。

ふと横を見ると、セルジオが笑い転げ、ロレンツイオがやれやれ、と肩をすくめていた？

とりあえず、拳銃やらコロシやら物騒なことからミシエルを遠ざけるため、適当な言い訳を探す。

「ミシエルはアンナみたいになりたいんだよね？ だったら、語学を勉強しないと。アンナは6か国語話せたぞ。」

嘘ではない。アンナは顔もいいが頭もいい女だった。ただし、6か国語話せるその才能はもっぱら男を口説くのに活用されていたが。

ミシエルは神妙な顔をして頷く。

「男から情報を引き出すには、その国の言葉でささやけば、イチコ口だって、アンナがいつてました。私、がんばります。」

何を・・・頑張るつもりだ？ そんなことは頑張らなくてよろしい。大人しく語学の勉強でもさせようと思ったただけなのに。アンナは子供にいったい何を教えていたんだ？

「ミシエル？ 何をがんばるつもりだ？」

ミシエルはきょとん、とした顔で私をみた。

「だから、語学でしょ？」

私がほつとすると、ミシエルは続けた。

「それで、男から情報を引き出すんでしょ？ セクシーでなきゃ、

だめかなあ？」

自分のまったいらな胸を見下ろしている。
やめてくれミシエル。

アンナが与えた影響は思いのほか深いらしい。

セルジオがゲラゲラ笑いながら助け舟を出した。

「そんなへんてこりんな漫画の女スパイみたいな真似、必要ないよ、ミシエル。ささやかなくなつて、盗聴器しかけるとか、方法はいっぱいあるから。まあ、語学はやりたいたいならやれば？ フランス語、おじさんが教えてあげようか？」

セルジオはなんだか怪しげな表情でウィンクしている。ますます変な知識だけ増えるに違いない。

・・・これは助け舟ではない。泥船だ。しずめ！ 二度と浮いてくるな！

「ウン、盗聴器の使い方、今度教えてね！」

キラキラしたミシエルの瞳。

まっとうな子に育てるはずが・・・。違う。絶対に何かが違う。

ボスの思い 2

射撃にフランス語に盗聴器の使い方。どうしよう。どんどん勉強しないといけないことが増えてくる。フランス語はママの国の言葉なのに、ほとんどわからない。ママがフランス語を話すのをほとんど聞いたことがない。ママはパパと結婚したときに、故郷とも家族ともお別れしてしまったそうだ。

ボスはやっぱりいつも不安そうな表情だ。ボス、軟弱ですね。待っていてください！やる気がわいてくる。パパ、私はがんばります。

ロレンツィオが長期で不在のときは、ボスの家に預けられている。でも、ロレンツィオが不在のときはボスもセルジオもたいてい一緒に不在なので、警備の男や使用人さんたちがいる広い家で、なんだか落ち着かない。いけ好かない家庭教師のマリオはちゃんと来るし、つまらない。

もつと、ボスのそばにいて、守りたいのに、全然相手にしてもらえない。

射撃は結構自信がついた。最近はお口径の大きいものに挑戦している。

本当はアンナが使っていた四十四口径マグナムを使いたいんだけど、あれはけっこう反動が大きくて全然扱いこなせない。腕が痺れる、とロレンツィオにいうと、これは女が使う銃じゃない、危なすぎると、取り上げられてしまった。

アンナみたいにロレンツィオとタッグをくめるようになったら、きっとボスのそばに置いてもらえる。

きつと・・・。

私はボスの家のソファでウトウトしていたらしい。

戸が開いて、ロレンツィオとボスとセルジオが入ってきた。

「勉強もしないで、お昼寝か？ いいご身分だな？」

ロレンツィオが苦笑しながら言うのが聞こえ、あわてて飛び起きた。

しまった。

「ボンジュール。ジュ マ ペール ミシエル・・・」

ゲラゲラとセルジオが笑い、クスクスと上品にボスが笑った。

ボスが笑うところはあんまり見たことがなかった。

ボスは・・・笑うと綺麗だ。もともとすごくハンサムだけど。

私はなんだかバツが悪くてうつむいた。

セルジオは笑い上戸なのか、笑ってるところしかみたことがないくらい、いつも笑ってる。

「ボンソワ、ミシエル」

セルジオは私の耳元でささやくようにいつてニヤリと笑った。

なんだか耳元からゾクリとするような、くすぐったい感じがして、私は毛を逆立てた。

あ、私が猫だったら、そんな感じ、ってかんじ。

ボスは嫌そうな顔でセルジオを睨み、

「ミシエルに余計なこと、教えるなよ」といった。

余計なこと。

「11か国語で「トイレはどこですか？ 超もれそうです」

って、教えてくれたことだろうか？
でも、これは一番重要な言葉だと思う。ちゃんと、手帳にメモしてある。

15か国語で披露してくれた、

「あなたを死ぬほど愛しています」

は使えそうもないし、すぐ忘れちゃったけど。

あれから、私は用心棒にしてもらえないままどんどん時間ばかり過ぎていく。ボスもロレンツイオもセルジオもみんな忙しそうだし、暇をみてはセルジオが怪しげなフランス語やらスペイン語を教える。ロレンツイオは「スポーツ」の射撃と、「護身術」の武道・空手とか合気道とかまぜたものらしい、を教えてくれている。ロレンツイオの指導は厳しいし、無駄がない。

なんだか、最近のロレンツイオは疲れているみたいで、心配だ。それに、「護身術」といつているけど、単なる護身術なんかではなく、確実に相手を倒すためのものであることは、私にもわかる。相手の急所を確実につく、武器も使う。本気で教え込もうとしている。たぶん、危険なことが最近多いのだろう。

もうそろそろ、いいんじゃないだろうか？私も役に立ちたい。

今日は家政婦のマリアと一緒に料理に挑戦した。ロレンツイオの好物の魚介類のスープを作ってみたのだ。カサゴがメインでイカや貝がどっさりはいったやつ。ちなみにマリアの旦那さんのネットさんも好物なんだって。

「ロレンツイオ！ 私も手伝ったの。おいしい？ おいしい？」

ロレンツイオは目を細めておいしいよ、といっていっぱいおかわりしていた。ロレンツイオは絶対嘘はいわない。ロレンツイオが元

気になったみたいで嬉しい。

「ミシエルは料理が上手いな。いいお嫁さんになるぞ。」

ロレンツイオはワインを飲みながら機嫌良くいう。

私はうなずいた。

料理はマリアが作ったのを手伝っただけだから関係ないけど、実はもう一つ、計画がある。ちっともボスの用心棒にしてくれないけれど、ボスを護るもう一つの計画。パパの代わりの用心棒ではなく、アンナの代わりとして、ロレンツイオのパートナーになるのだ。

ロレンツイオだってアンナの代わりがいないと、仕事がやり辛いかともあるかもしれない。もちろん、アンナみたいに凄腕の殺し屋兼ボディーガードになるのは難しいけれど、射撃の腕はなかなかだといわれているし、ロレンツイオ直伝の護身術だって、もうすぐ完璧になるのだ。

お嫁さんと仕事上のタッグを組むパートナーがどう違うかよくわからない。アンナとロレンツイオはごっちゃになっていたから。だから、まあ、お嫁さんみたいなパートナーで別に私はかまわない。ロレンツイオのことは大好きだし、尊敬している。それで、ロレンツイオと一緒にボスを護るのだ。料理も必要なら少しくらい覚えてもいい。

だから、私はいった。

「うん。ありがとう。私、いつか、ロレンツイオのパートナーになりたい。お嫁さんでもかまわない。」

そしたら、ロレンツイオは固まってしまった。

「いや、そういう訳じゃ、ないのだが……。」

あわてて否定されて、悲しくなった。

ボスの思い 3

「ミシエルは絶対にお前には、嫁にやらん！！ カタギの男に嫁がせる！！！」

気が付くと、私は興奮して立ち上がり、叫んでいた。
やはり横でセルジオが笑い悶えている。

こともあろうに、ミシエルがロレンツィオのパートナーになると言い出したらしいのだ。アンナに憧れているのはわかるが、だからといってなにもロレンツィオの嫁なんかなる必要があるだろうか？ いや、ない。

ロレンツィオは苦笑いをしながら葉巻をくわえた。

「嫁というより、俺とタッグをくんで、ボス、あなたを護りたいそうですよ。いやはや。」

なんとという健気な・・・？

こう、胸にじんとくる・・・？ じゃなくて。

「まだ、あの子はそんなことをいつているのか。ロレンツィオ、お前がついていながら、なんだ。まっとうな子に育てるんじゃないかったのか？」

ロレンツィオは首をすくめていった。

「あの子の父親役は無理です。はじめから私をボスを守る仲間とか先輩ぐらいにしかみていない。あるいはコロシを教えてください先生とか？ それだけ父親面するなら、あなたが育てればいい。もう、結構育っちゃってますけど？」

ミシエルはいつのまにか14歳になっていた。お誕生日を祝って

やればよかった。

忙しくて、忘れていた・・・じゃなくて。

あの子には、そう、コロシの先生とかそんな物騒なものではなく、やっぱり愛情あふれる父親が必要なのだ。

「あ、でも。アキラが父親らしいことするとこも、みたことないですけどね？ 射撃の手ほどきとかはやってましたよ。スプーンより先に水鉄砲もたせていたし。あと、トレーニングとかいって、マラソンさせたり、走っている車からパチンコでリング落とさせたり。そうそう、車の運転もやらせてました」

ロレンツイオはそういうと葉巻の煙を盛大に吐き出した。

のおおおお！

ミシエル。

アキラにロレンツイオにアナ。あの面子に育てられてまともに育つはずがなかった。せめて母親が生きていればよかったが、まだミシエルが幼いときに亡くなってしまっている。ミシエルの母親は美人だった。ミシエルも母親似の美人になるに違いない、って、そうじゃなくて。

「わかった。私が引き取る。私がミシエルを立派に成人させてみせる。そして、カタギの男のところに嫁にやるのだ。」

セルジオが爆笑していた。

「ボス、無理です。ミシエルは誰にも嫁にやらないってこねるにきまっている」

そういつて、ぐひゃひゃひゃ！ と、変な笑い声をあげていた。
？

ボスの思い 4

なぜかわからないけど、突然ボスの家に呼ばれることになった。これからは、ボスの家で暮らすという。これは、あれに違いない。ボスが私を認めてくれたのだ。用心棒として。

どうしよう？ 銃はどれにしよう？

サブマシンガンのスコルピオンはさすがにまずいだろう。テロリストみたいだし。

パパの形見の中から一番軽く扱いやすい拳銃を選ぶ。パパの拳銃は西部劇に出てくるような回転弾倉式のリボルバーがほとんどだけれど、オートマチックもある。本当はリボルバーが好きだけど、連射するなら、発射、廃莢、給弾が自動で行われるオートマチックのやつがいいだろう。ライフルも後でもっていこう。

腰のホルスターに手をやり、銃を引き抜く。OK。

「ロレンツイオ、今までありがとう。これからは、ボスの用心棒としてがんばるからね！」

私は嬉しくて嬉しくて、ロレンツイオにぴょんと抱き着いた。ロレンツイオはなぜか微妙な表情をして、いや、とか、まあ、とか曖昧な返事をした。

すごく久しぶりにボスに会うので緊張している。だって、ついにボスを護るという大役を任されるのだ。本当はすぐに護りたかったけれど、準備が必要だったのだ。

ボスはわざわざ玄関口まで迎えに出てくれた。射程距離に危険がないかチェック。もちろん、この建物は厳重な警備がされているのだけれど。

「ミシエル、久しぶりだ。あれ？　また少し大きくなったかな？」

ボスが笑っている。ボスの笑顔は、なんていうのか綺麗でドキドキする。

でも、前みたいに不安そうな顔じゃない。ひょっとして、私がモタモタしているうちに、軟弱ではなくなってしまったのだろうか？　もし、そうなら、私は用済みなのだろうか・・・？

「ミシエル？　さあ、入って」

ボスの大きな手が私の肩を押した。

ボスの大きな手。よく覚えている。一度目はママが死んじやったとき、私の手をにぎってくれた手。二度目はパパが死んじやったとき、私の肩においた手。

「ボス、よろしくお願いします。ボスの用心棒として、役目を果たします」

私がボスに向かっていうと、ボスはため息をついて私をみた。

「ミシエル？　ロレンツイオから何もきいていないのか？」

何のことだろう？

「まず、その銃をわたしなさい」

私はのろのろと銃をボスにわたした。

「ホルスターもはずしなさい」

腰につけてあったホルスターをはずす。

「これは、必要ない」

ボスはきっぱりというと、パパの形見の銃を机に置いた。

私は銃とボスの顔を交互にみる。

自分が必要ないといわれているようでショックだった。

「コロシとか、用心棒とか、そんなもの私には必要ない」
ボスは私を見下ろしてそういった。

かつての不安そうなお、泣きそうな表情は全くなかった。
ボスはもう軟弱でなくなった。だから私は必要ない、ということ？

私はにぎりしめている自分の手が冷たくなるのを感じた。

私がずっと、がんばってきた射撃とか、全くの無駄、そういうこと？

泣きそうになるのをなんとかこらえた。

必要ないといわれてもボスの前で泣くわけにはいかない。

でもボスの表情は私を拒絶しているものではなく、困惑する。
とても優しい目をしている。

やっぱりボスは綺麗だと思った。

「こっちにおいで」

ボスにひきよせられ、気が付いたら腕の中にいた。

「寂しい思いをさせたね。ロレンツイオに任せていたのがいけなかった。これからは、私をアキラの代わりだと思ってってくれる。お父さんだと思ってくれていいんだよ。ちゃんと守ってあげるから。

ミシエルが望むなら、高校や大学に行くといい。そうだな、安全な日本とかいう国の大学へ留学してもいい」

ボスは私の頭をなでながら、そういった。

なぜ、アキラの代わりにボスを護るはずが、ボスがアキラの代わりになることになっているのだろうか？

なんのためにボスから遠く離れた日本とかいう安全な大学へ留学しなくてはならないのだろうか？

さっぱりわけがわからない。

「ボスと呼ぶのもやめてくれ。お父さんでいい。いやだったら、カル口でもカル口おじさんでもいい」

お父さん?! 私はボスの腕の中で頭をなでなでされ、居心地の悪い思いをしていた。これではまるで・・・小さな子供だ。ボスをお父さんとよぶには若すぎるし、それに、腕の中で頭なでなでなんて、パパにもされた覚えがない。ボスは私をパパが恋しい小さな何もできない子供かなんかと間違えている。

こんなに頑張っているのにどうしてわかってもらえないんだろう？

ボスの思い 4（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

ボスの思い 5

ミシエルが恥ずかしそうに顔をあげたので、あわてて体を離れた。ミシエルの大人びた表情にドキリとする。いつまでも子供だと思っていたが、少女の成長は早い。

母親に似てきた……。アキラには内緒だが、私の初恋はミシエルの母親のソフィだったりする。ミシエルにはその面差しがある。大人になったら美人になるに違いない。今でも十分に可愛いが……。

ハツとする。これではまるで親ばか丸出しだ。

だれにも嫁にはやらないといってこねるにきまつてゐる、といったセルジオの言葉が蘇る。いや、私はそんなに心の狭い男ではない。

でも、そろそろボーイフレンドの一人いてもおかしくない年頃だ……。じゃ、なくて。

「私、もう子供じゃありません」

ミシエルが突然キツパリといった。

「ま、まだ子供だろう？」

少なくとも大人ではない。まだ庇護が必要な年頃だ。

「私じゃ、だめですか……？」

切なげな潤んだ瞳が私を見あげる。

ヤバイ。可愛すぎる。娘を嫁にやりたくない親父の気持ちか……。わかってしまう。

「ボスのそばで……。ボスのために……」

泣きながら言ってる言葉の半分もききとれない。

「お前はまだ子供だ。庇護が必要な年なんだ」

私は断言した。親ばかりでいい。この子を守る。

ボスの思い 5 (後書き)

読んでくださって、ありがとうございます。

すれ違い 1

ボスのバカ。おたんこなす。

どんなに私が成長したか説明しても、聞いてもくれなかった。

射撃の腕前をみてほしいといっても、銃にすら触らせてくれなかった。

お前は子供だ、そればっか。

頭から私を子供扱いして。

これじゃ、用心棒なんて無理に違いない。

確かにボスは軟弱そうじゃなくなったけど、そういう意味では用心棒の必要性は減ったのかもしれないけど、人の話をまともにきけない所とか、頑固なところとか、全体的に子供っぽい。庇護が必要なのはボスの方だと思う。現に、セルジオやロレンツィオがお守りしてるわけだし。

私一人増えたところで、セルジオもロレンツィオも助かるだけで、困ることなんかない。足手まといにもならないと思う、たぶん。ロレンツィオの話だと、最近は以前に比べ大分マシになったけれど、この間も車に乗り込むときに襲われかけたらしい。私だったらボスが来る前に駐車場のチェックくらいするし、危険なやつは始末する。

もついい。私はボスの家を出ることにした。

だって、ボスの家にいたら、五月蠅いことこの上ない。

自分が子供のくせして、まるで私を小さな子供扱い。

銃には1ミリも触らせてもらえないし、武術の稽古もダメ。これではせっかく鍛えた体も勘もなまってしまう。

語学はかろうじていいけれど、「夜間飛行」を原文で読むってど

うなの？

超もれそうです！の方がだんぜんマシ。

ピアノの練習とかどうでもいい。

あるのも知らなかったけれど、やけに立派なグランドピアノが置いてあって、やることがないなら練習しろという。

エリーゼのために？ 私はボスのためにいるんですけど？

敵をやっつけて、ピアノを棺桶のかわりにするっていうなら話はわかるけど、っていったら、お父さんはそんな物騒な娘に育てた覚えはない！ だって。けど、そんな娘に育っちゃってるんですよ、こっちは。とつと私に護られていればいいものを、お嬢教育。なぜ？

おまけに車の運転もダメってどういうこと？ 車なんて誰だって運転するでしょ。イマドキ、猫だって運転する！ といってやったら、猫は運転しないと冷静に返された。お前はまだ免許をもっていないはずだって。「免許なんて車を運転できるようになってからとりにいった方が安上がりだ」ってパパもいつてた。そういったら、前のパパの言ったことは忘れなさいといった。

この言葉に私はキレちゃったのである。

パパはパパだ。私のパパは一人しかいない。ボスはパパじゃない！

絶対にいつてはいけないことを、ついいつてしまった。

「軟弱な子供のくせに！ 大人しく私に護られていればいいのよ！

！」

・・・いくらなんでも言い過ぎた。

ボスに対してあまりにも失礼だった。

でも、口から出てしまった言葉はもう戻せない。

私は、ボスの家を出て、ロレンツィオのところに戻った。

ロレンツィオのところに戻っても、しばらくボスの顔が頭を離れなかった。

最後の一言を言っちゃった後のボスの顔。

傷ついた子供の顔をしていた。

護らなければならぬ人を傷つけるなんて。

頭を撫でてくれたボスの手の温もりとか、優しい綺麗な笑顔とか、思い出したくないのに思い出す。

やっぱり、癩癩をおこさなければよかった。あんなこと、いわなければよかった。そうしたら、少なくとも、ボスのそばにいられたのに。そうすれば、ボスを護るチャンスだって、きっとあったのに。

すれ違い 1 (後書き)

エリーゼのために (ピアノ曲名)

いつもありがとうございます。

すれ違い 2

かわいい娘が出て行ってしまった。

父親宣言をしてまだ一週間もしていないのに。

何がいけなかったのか。

何もかもいけなかった。

全てすれ違いだった。

まっとうな子に育てるために、射撃や武道は遠ざけた。もちろん、スポーツとしてならいい。だが、なまじ腕がいいだけに、将来が怖い。ロレンツイオの話ではアンナもびっくりのS級らしい。さすがはアキラの娘だ。

フランス語をやりたいというので、講師を呼んでやったら、講義を始めてすぐに居眠りを開始し、起きたと思ったら綺麗な発音で、超もれそうです！ とどなってどこかへいつてしまったという。

暇そうだったので、ピアノの前に座らせたが、エリーゼのためじやなくてボスのため、とかぶつぶついつている。ピアノを棺桶のかわりにするとか物騒なことを言い始める始末。

ピアノに飽きたのか、

「ちょっとドライブにいつてきてもいいですか？ 申し訳ありませんが、車のキーをかしてください。なるべく早くお返しします」

と、丁寧な言葉で上目使いにいう。

ミシエルの上目使いは可愛い。

それは、認める。

だが、14の娘がドライブに連れてってじゃなくて、キーをかせ、
ときた。運転するのかと聞いたら、猫でも運転するとおっしゃる。
すべてが万事こんな調子で。

そして。

「軟弱な子供のくせに！ 大人しく私に守られていればいいのよ！
」

軟弱な子供とは私のことなのか・・・。

茫然とする私の横でまたもやセルジオが爆笑していた。

ミシエルは

「セルジオっていつも笑ってるのね。もういい。ロレンツィオの
ところにかえる」

そういつて出て行ってしまったのだ。

「いやあ、一週間もたないとは。今回の賭け、ロレンツィオの勝だ
な。ボス、愛しい女を一週間も繋ぎ止められないなんて、情けない
ぜ？」

セルジオがニヤニヤしながらいった。

「賭け？ 何のことだ？ お前、ロレンツィオと賭けなんかしてい
たのか？」

私が言うと、セルジオはウィンクしていった。

「ロレンツィオが一週間もたないだろう、っていったから、賭けを
したんですよ。もちろん私はボスを信じて一週間くらいはもつ、っ
て方に賭けたんですけどね。ボスを信じたばっかりに大損ですよ」

そういつて、ぎやははは、と変な笑い声をあげた。

ロレンツィオのやつ。しれっとした顔で、じゃあミシエルをよろしくお願いします、とかなんとかいいながら影でそんな賭けをしていたとは。

絶対に許さない。ロレンツィオにはミシエルはやらん。
黒い気持ちを抑えることが、私にはできなかった。

まっとうな生活 1

「全寮制の女子高？」

私は絶句した。

昔、マフィア関係者の子供達がさらわれて人質になる事件が相次ぎ、それ以来学校にいつてない。家庭教師をつけて適当に勉強してきただけだった。

「それ、入るの？ っていうか、入れるの？」

「コネでなんとでもなるらしいな。ミシェルも賢いし。とにかく、ボスの命令だ」

ロレンツイオがすまなそうな顔をしている。

そうきたか。敵も然るものである。

こうなれば、こちらも意地だ。死んでも用心棒になってやる。全寮制の高校生活とやは別嫌ではない。少し、興味もある。

けれど、私から射撃や武道や用心棒を取り上げるために、そこまでする？

あの、最後のひどい私の捨て台詞へのあてつけだろうか。

・・・考えたこともなかったけれど、私の存在は迷惑だったのだろうか？

ロレンツイオも、ボスも私が迷惑だったのだろうか？

少し、いや、かなり不安になった。

「ロレンツイオ、私がいると迷惑・・・？」

思ったことはすぐ口から出てしまう。

「まさか。迷惑だなんて思ったことは一度もない。ミシェルがいて

くれると楽しいよ。でも、そうだな。同じ年頃の人と一緒に生活するのも悪くないと思うよ。いろいろな世界があることを知った方がいいかもしれない。暫く、ここから、この世界から離れてみるいい」

ロレンツイオは絶対に嘘はいわない。

だから、迷惑では、ない。

ただ、少しここから離れて別の世界で暮らした方がいい、そういうことだ。

ロレンツイオとボスが全寮制の高校にいけ、というなら私はそれに従うしかない。

「ロレンツイオ。もし、もしも・・・、3年間ちゃんと高校にいつて、戻ってきて、そのとき私が・・・、ロレンツイオのパートナーにふさわしかったら、パートナーにしてもらえる？」

私は勇気をふりしぼっていった。

ロレンツイオはじつと私の目をみていった。

「・・・いいよ。3年間、よく考えるといい。人を守るといいながら、自分の命を懸けるということがどういうことなのか。俺は・・・ミシエル、やはりお前に平和な世界で生きてほしいと思っている。・・・アンナやアキラのように死んでほしくないと思っている。ミシエル、愛しているよ」

ロレンツイオはそういつて私をギュッとハグしてくれた。

まっとうな生活 1（後書き）

読んでくださった方、どうもありがとうございます。

まっとうな生活 2

全寮制、ときいていたけれど、甘い。

隙など探せばどこにでもある、と、パパはいつていた。

確かに外泊や夜間外出に制限はあるけど、親の書いた届さえ出せば許可証がもらえて自由に外出できるし、放課後の3時間は部活動や奉仕活動に割り当てられていて自由に時間をすごせる。

ロレンツイオが後見人になっていたため、ロレンツイオの筆跡を真似て土日にも何時でも外出できるよう、届を偽造し、出しておいた。いざという時のために、とパパはお金を用意してくれていた。お金はある。

それから、何かあったらこの人のところへ行け、といわれていた人の住所。パパの武道の先生だそうだ。

パパの形見の拳銃。いっぱい種類もある。

部活は一番監視が弱いコーラス部を選んだ。そもそも人数がたくさんいるし、コーラス指導の先生のやる気もないので、みんなでおしゃべりして解散、という日もある。

「コーラスには腹筋が必要だから」

というこじつけで、私は歌わずに体を鍛えてばかりいた。射撃の安定には下半身の強化が必要だし、大きめの銃を扱うには筋力も必要だ。

土日は許可書をもって、パパのお金でタクシーと電車にのって、パパの武道の先生のところへ行った。先生はもうおじいさんだったけど、パパのことをよく覚えていてくれて、パパが死んじやったことを悲しみ、私にはタダで！ 稽古をつけてくれた。そして、その道場でいろいろな人と出会った。

類は友を呼ぶのか、そういう職業の人が先生の道場に通うのか、先生の道場には、パパの射撃仲間も顔を出していて、射撃の練習はそちらのコネでできることになった。そこで、いろいろな武器の扱い方も教えてもらえた。

授業は語学と、パパの射撃仲間のブルーの忠告を聞いて、社会経済、法律はまじめにやった。「やばい橋を渡るには、法律を味方につける」ことが重要らしい。そして、世の中は「なにがともあれ金」だから、経済は勉強した方がいいとのこと。

そんなわけで、まじめな学生、コーラス部員としての肉体トレーニング、武道の練習、射撃の練習。結構どころか、かなり忙しい学生生活となった。

友達も一応できた。みんな将来の話や恋愛話（しかも架空の、未来形！）でもりあがっていて、子供っぽくて可愛いな、と思う。

本物のボーイフレンドがいる子もいるけれど、全寮制だからなかなか会えない、とかいつている。本気で会いたければ、私みたいに屈を偽造するとか、深夜に抜け出して逢引きするとかすればいいのに。

将来の職業の話も「用心棒」と答えたらドン引きされるのはわかっているし、そもそもそういう職業はひっそりとなる、と相場はきまっているから言わないことにしている。

「ミシエルは？ 好きな人とかいないの？」
ときかれたので、

「パートナーになる人は決まっているの」
と、答えたら、

「ええー？ ミシエルもう婚約してるの？ お嬢は違うよねー」
と、いわれてしまった。

婚約とはちょっと違うけど、めんどいので放置。

入学するときにボスが張り切っているいろいろな高価な靴やら靴やら揃えてくれたので、お嬢、ということになっている。これも、違うけれど、めんどいので放置。お嬢がお迎えつきの車ではなく、タクシーと電車を使うのはあやしいとか、そういう細かいことに気が付きもしない。

私にとって「友達」はどっちかというところ、道場の先生のところで老若男女関係なく出会った人々かもしれない。

夕食とお風呂の後、授業の宿題を終えると、夕方の筋力トレーニングの疲れもあって一瞬にして眠ってしまう。同室のエレナとおしやべりの最中に眠ってしまうこともしばしばで、アンタって子供みたい、などといわれている。それでも、ごくたまに、ロレンツイオに最後に言われた言葉を思い出す。

3年間、よく考えるといい。自分の命を懸けるということがどういうことなのか。ミシエル、やはりお前に平和な世界で生きてほしいと思っている。

そういわれても、他の生き方がよくわからない。

エレナは学校の先生になって、好きな人と結婚するといっていた。学校の先生、というのもどうしてもピンとこない。

好きな人、というの。アンナとロレンツイオはかっこよかった。すごい美人のアンナを背の高いロレンツイオがエスコートして。二人が歩くと、みんな振り返った。アンナとロレンツイオは私の憧れだ。

ロレンツイオは3年たってふさわしければ、パートナーにしてくれるといったのだ。

まっとうな生活 3

もうすぐ文化祭だ。コーラス部も発表会を行う。学校に家族も招待するイベントだ。歌なんてろくすっぽ、覚えていない。筋トレしかしていないもの。

でも、ロレンツィオに会えるのは嬉しかった。

当日、私はみんなとお揃いの衣装をきて、ロパクで舞台に立った。ちゃんと上手に歌っている子もいればロパクの子もいる。コーラス部はもともと熱心な部ではないので、こんなものだろう。そうひどくはない。いつも熱心な吹奏楽部はやはりとても上手な演奏だった。吹奏楽の演奏も終わり、休憩になった。

父兄席に目をやる。

小学生じゃあるまいし、わざわざ見に来る親は少ないかも、と思ったけれど、それでもかなりの人数がいる。親じゃなくて、ボーイフレンドとかかもしれないけど。ロレンツィオは背が高いからすぐにわかるはず、ってそういう問題ではなかった。異様に目立った。ロレンツィオとボスが父兄席にビシッとスーツを着て座っている。なんだかそこだけ異様に浮いていた。ロレンツィオは190cm以上あるし、ボスも185cmはある。体格がいいから、というわけではなく。ロレンツィオは渋いし、ボスはハンサムだから、いうのでもなく。まわりの人間と明らかに空気が違う。柔らかな白い羊の群れにドス黒い狼が2匹まぎれているようなかんじ。

「びつくりした。ロレンツィオだけだと思ったら、ボスもみにきてくれたの？」

私はとりあえず、せっかくきてくれた黒い狼、じゃない、ボスに挨拶した。

「ロレンツイオが発表会のことを教えてくれたからね。それにしても、ミシェル、コーラス部に入っていたのか。びっくりしたよ。ピアノにも興味なさそうだったから、音楽は好きではないのかと思っていたが。今度、オペラでも聴きに行くか？」

と、ボスが嬉しそうに言う。

ごめんなさい、ボス。ロパクの歌をわざわざ聴きにきていただいて。

私はハッキリ言って、一音も歌っておりません。

オペラ？

「ううん、いいです。寝ちやうから」

私がいうと、くくく、と横でロレンツイオが笑っていた。ロレンツイオは私がロパクだけなのを見抜いていたのかもしれない。

「そうか？ 遠慮はいらないよ・・・？」

と、ボス。遠慮じゃないんだってば。そういつているうちにブザーが鳴った。

次は演劇部の発表だ。私は、生徒達の席へ戻った。

「ちょっと、ちょっと、ミシェル、あのかっこいい人誰？ まさか、あれが噂の婚約者？」

席にもどるとエレナが鼻の穴を膨らませてまくしたてた。

「しーっ！ 演劇部、はじまっちゃう。違うよ。あれは、死んじやったパパの仕事関係の人」

会場が暗転して、演劇部の発表が始まった。

「ええ？ じゃ、もう一人の人？ あの背の高い、渋い人？」

「そう、そうだから、だまって！」

あわててエレナを黙らせる。演劇部のエース、シルビアのセリフが始まる。

女子高だから、当然男役も女の子がやる。背が高く綺麗な顔立ちのシルビアは王子様役が多く、生徒のファンも多い。ファンを怒らせると怖いのだ。

会場に明かりがともし席がざわざわしだした。

15分間の休憩だ。

「背の高い渋い方かー。あっちも捨てがたいけれど、私はあの金髪のかっこいい彼の方がいいなあ。それにしても年上かあ。いいなあ、いいなあ」

エレナはうつとりといい、後ろの父兄席をみている。

「ミシエル、ごめん。用事が入ったからそろそろ帰るよ」

ボスの声がして、私は振り返った。エレナが顔を赤らめてうつとりとボスをみている。

「ボ・・・、カルロおじさん帰っちゃうの？ロレンツイオは？」

ボスはまずいだらう。ボスは。

私はあわてて言葉をのみこむ。

「ごめん、ロレンツイオも一緒に帰るよ。ミシエル、今度のクリスマスは一緒にすごそう。届を出しておくから、たまには帰っておいで。ロレンツイオもさびしがる」

エレナが怪訝そうな顔をする。

まずい。エレナには毎週土日は親戚の家に帰っていることにしている。

「あ、うん。かえるかえる。クリスマス楽しみだなー」

私はばつとエレナとボスの間に立った。

「何かほしいものはあるか？ クリスマスまでに考えておくんだよ？ じゃあ、いい子でいるんだよ」

そういうと、私の頭を2回ポンポンとたたいた。いつものボスの大きな手。

ボスはエレナを振り返るとにつこりほほ笑んだ。

「じゃあ、君、ミシエルをよろしく」

ボスがロレンツィオと帰った後、エレナの尋問にあった。

「えーと、ミシエルのパパとママは死んじやっただよね？」

「は、はい」

「で、今の金髪のかつこいい彼はパパの仕事関係の人？」

「えーと、まあ、そうだけど」

「婚約者は背の高い渋い人？」

「えーと、婚約者っていうか、まあ、パートナーの予定？」

「週末どこに帰ってるの？ 噂では毎週、公認の婚約者に会いにいってるって聞いたけど？ それに、どっちかっていうと、背の高い彼より、金髪の彼の方が婚約者っぽい感じがしたけど？」

うつうつ……。嘘は計画的につきましよう。

「えーと、親代わりの親戚の人がいて……。週末はそっちの方に帰っていて」

「でも、あの人居出すから帰ってこいとかいってたよ？ 本当にしたの？ パパの仕事関係の人？」

「えーと、あの人も遠い親戚の人で……。あの人も親代わりっていうか……」

エレナは疑いの目で私をみている。

「あ！ そうそう。スポンサーなの。あのおじさんがこの高校のお金、出してくれたの」

嘘はついていない。

パパが「殉職」したときに、ボスがそういつていた。

万が一「殉職」した場合、ミシエルの一切の教育費はボスが支払う、そういう契約になっている。よくわからない書類も見せてくれた。だからお金のことは心配しなくていいといていた。

「足長おじさん？ お金持ちなの？ すっごいわね。ねえねえ、足長おじさんの方と結婚しちゃえば？」

えーと。大分違うんだけど。

めんどいから、放置？

エレナの興味は恋愛とか結婚とかに移ったのか、キャーとかいっている。

ホッと思をつく。

嘘は計画的につこう。

私は心に誓った。

結局、ロレンツイオとはほとんどしゃべれなかった。

それにしても、今日のボスはなんだか嬉しそうだった。

ぼんぽん、と頭をたたいたボスの大きな手の感触がいつまでも残る。

わりと普通なクリスマス 1

（今回はロレンツィオの視点）

今日はミシエルが寮から帰ってきている。

久しぶりにミシエルと二人水入らずで、といきたいところだが、
今晩はボスの所でクリスマスパーティーの予定だ。ミシエルを連れてこいとうるさい。はっきりいってミシエルのためだけにクリスマスパーティーを開くのだろう。

寮から帰ってきたミシエルは何やらアンナの部屋でございまして
いる。

アンナの持ち物は好きに使っていいといっている、今夜のパーティーのためのアクセサリーでも探しているのかと微笑ましい気持ちでいた。

「かわいい！ これ！」

と喜んでいるので、どれどれ？ と覗きに行くと。

アンナのお宝の中でもそれは、銃だった。

かわいい！ と手にとっているのは、小型銃デリンジャー。手のひらサイズのそれは隠し持つのに丁度よく、護身用にも暗殺用にも使える。アンナお得意の超接近戦用？ いや、密着戦用の銃だ。いそいそと銃の手入れを始めようとする。全く、頭が痛い。

「ミシエル。そんなことよりも、パーティーの仕度をしなさい。銃より服を探しなさい」

そういうと、はい、と意外にまともな返事が返ってきた。

しかし、さてよ。アンナの服は露出度の高いセクシーなものが多かった。ミシエルもだいぶ背がのびたが、それでもまだまだアンナよりは低い。それ以前にボディラインが全然違うような……。服でも買ってやるか……。

しばらくこそそこそそしていたと思うとアンナの部屋から出てきた。

「ロレンツィオ、どお？」

ミシエル。

かわいいよ。お前はいつでもかわいい。

お前がアンナに憧れているのは、十二分に承知している。
だが。

そのアンナの服はちょっと・・・。

「うーむ。胸の谷間というよりは、隙間？」

おっと、つい余計な事を・・・。

「そ、そうか。ここに銃を隠しもつこともできたか。スカートの下
が定番だと思っていたけど。」

と、胸の隙間を見下ろしている。

いや。どう考えても無理だから。

わりと普通のクリスマス 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
ちよっとはやいけどクリスマスの話。

わりと普通なクリスマス 2

(ミシエル)

クリスマスプレゼント。

本当は拳銃のグロック26が欲しかった。

当然というか、銃はもらえなかった。でも。どうしよう？ なんだかすごく嬉しい。銃じゃないのに。

ボスがくれたのはピンクのハート型のネックレスだった。なんだかすごくプレゼントっぽくて、どうしていいかわからない。ネックレスを握りしめたままおっとしていると、ボスがかしてごらん、といって後ろからネックレスをつけてくれた。うん、似合っているよ。そういつてボスはいっこり笑い、私のほっぺたにキスをした。わああ。なんでだろう？ 心臓がときどきする。

(ボス)

ゆでたこみたいになってうつむいているミシエル。プレゼントしたネックレスがミシエルの胸元で揺れている。恥ずかしそうな、でも嬉しそうなミシエルを見てみると、こちらも嬉しくなってしまう。ミシエルから私へのプレゼントは・・・ボディーマー（防弾チョッキ）だった。いや、嬉しくないわけじゃない。ミシエルが一生懸命考えてプレゼントしてくれただけでもすごく嬉しいのだが・・・。だが、こんなものをどこで入手してきたのか。ロレンツイオはミシエルお手製のクッキーをもらっていた。ちよつとうらやましい。ちよつとくれないかな。ロレンツイオは甘いものそんなに食べないはずなんだが・・・。

(ロレンツイオ)

ミシエルからもらった手作りのクッキーをほおばっていると、ボスが欲しそうな顔でみている。ミシエルから特別プレゼントをもら

ったくせに、意地汚い。俺が甘いもの苦手？ミシエルからもらったものは、特別にきまっている。もちろん完食。一欠たりともやるものか。ごちそうさま。

（ミシエル）

ロレンツイオが私にくれたのは、暖かそうでもとても綺麗な手袋とマフラーだった。マフラーを巻くとなんだかロレンツイオに守られているような気がする。帰り道、さっそくマフラーをぐるぐる巻いて外に出る。寒くってもへっちゃらな感じ。

ロレンツイオにあげたクッキーは、寮が同室のエレナと一緒に作った。エレナの実家にお邪魔して、作らせてもらったのだ。

エレナが、パートナーの予定の人に贈り物をするなら「手作り」にするべきだっていったから。最初はエレナに薦められた「誰でも絶対に失敗しない簡単なマフラー」に挑戦したけど、惨敗。それでクッキーと一緒に焼くことになったのだ。クッキー作りもものすごく苦労した。マフラー編めたり、クッキー上手に焼ける人を尊敬します！

まっとうでない生活 1

ミシエルを全寮制の高校に入れて、3年。もうすぐミシエルの高校生活も終わりだ。ミシエルは輝くように綺麗になっていた。面立ちは母親によく似てきたが、母親のような繊細で壊れそうな美しさではなく、父親のアキラのもつ不思議と人をひきつける魅力をもっている。きちんと、学生生活を送り、普通の同じ年のお友達もでき、コーラス部にも入って。

私は誇らしいような気持ちでミシエルを眺めていた。土日にあわせ、ささやかなバースデーパーティーを催したのだ。ミシエルには今日、明日と帰省許可をとらせてある。今日は何か歌でも歌ってもらおうか。いつも私をおちよくっているセルジオはフランスに飛ばしておいた。

「ボス、お誕生会を開いてくれてありがとう。うれしい」

女らしいワンピースドレスをきたミシエルがふんわりと笑って腕をまわしてくる。

「ハッピーバースデー、ミシエル」

私は目を細め、ミシエルをハグした。かわゆい娘よ！

柔らかなミシエルの体の感触……。

いや？この体は……？

一瞬感じた違和感。

それは、娘らしくなったミシエルの体形に対して、ではない。

もう一度ゆっくりとミシエルの背に手をまわす。

「……ボス？」

ミシエルのワンピースドレスは背中が大胆にカットされていて、素肌が覗いている。

それが厭らしくなく、セクシーかつ健康的に映える背中。

ドレスを着こなし、自分に自信を持つている人間、あるいは日焼けしたりして全身に程よく色がのっている人間、それから全身をくまなく鍛えている人間。

ミシエルの背に見覚えがあつた。

アンナはセクシーで露出度の高い服を好んだ。セクシーでありながら、その体は凶器だつた。全身を常に鍛え抜き、一分の隙もなかった。ミシエルの背は、体は、鍛え抜いたアンナのそれによく似ている。

「・・・」

ミシエルは怪訝な顔をして私を見あげた。

長い睫にふちどられた可憐な瞳。

母親によく似ていながら、その瞳の奥に宿るものは全く違っている。

私はミシエルの瞳をみつめながら、ミシエルの手をとった。

手の感触を確かめながら、ゆっくりと自分の口元にもっていく。

ミシエルが顔を赤らめ、動揺している。

ミシエルの指先に口づけながら、ハッキリと悟った。

私のお目出度い勘違いを。

「ミシエル、なんだこれは？」

ミシエルの指先を握つたまま目の高さにつきだす。

ミシエルの指も手も銃を常に扱っている者にしかないはずの形跡がはつきりと刻み込まれている。コーラスをやっているだけではあり得ない腕の筋肉。皮の厚くなった手。

はつとしたミシエルがとっさに手をひこうとしたが、私は手を離さなかつた。

「どういうことかと聞いているんだ。お前は、全寮制の高校で、何

を勉強している？ まさか、授業で拳銃の使い方までならうのか？
ちゃんと学校にはいつているのか？ ミシエル、答えなさい」

「ちゃんと、学校にはいつているし、寮で生活している。勉強も頑張っているし、コーラス部もちゃんとずっと続けてる。でも、どうしても私はボスのそばにいたい。ボスを護りたい。それだけ」

ミシエルは泣きそうになりながら、それでも真っ直ぐ私の目をみてそういった。

もう子供の目でも子供の体でもなかった。

私はゆっくりと息を吐き、手をはなした。

ミシエルはこちらを伺うように、不安げな大きな瞳でじっとみている。

「好きにしる」

完敗だった。ミシエルの顔がぱあつと明るくなった。それは、大きなヒマワリの花が咲いたようだった。

私はミシエルを抱きしめていた。

よくよく聞いてみると、3年間高校でまじめに授業を受け、課外活動のコーラス部で体を鍛え？ 土日には父親のアキラの知り合いのところまで武術の稽古をしていたらしい。その上、そこでアキラの射撃仲間（と、ミシエルはいつていたが、その男はその筋では有名な武器商人のブルーだった）とも知り合いになり、射撃の稽古から武器の扱いまで一通り勉強していたというのだ。

ダメされた、という思いと同時にどうしようもない温かい喜びが胸を満たした。ミシエルの平和を願いながらも、そこまでも自

分のそばにいたい、自分を守りたいというミシエルが愛おしくて仕方がない。

ミシエルも、もう子供ではない。最近は世間の風潮も当局の監視も厳しく、ドンパチはほとんどない。安全のため、部下を養うため、当局の監視をくぐるため、違法な「ビジネス（取引）」から足を洗い、合法的な「会社」としての枠組み作りへ奔走してきた。まあ、その強硬策がしばらく裏目に出て命を狙われていたのだが。ようやく会社も軌道にのり、最近は表だった危険もほとんどない。我々もそろそろ、カタギといえなくもないのではないだろうか。まあ、まだ相当黒い会社だが。ならばしばらくミシエルを手元に置き、好きなようにさせておくのも悪くないかもしれない。あまり危険もなく、父親のときは時代が変わってきた事を肌で感じれば、賢い子だ、また、違う目標を見いだせるかもしれない。それでも、ずっと一緒にいたいといいはるなら・・・妻にしてもいい。

そう思つてミシエルをみると、ミシエルは嬉しそうにロレンツイオと寄り添っていた。そういえば、ミシエルの願いはロレンツイオのパートナーになり、ロレンツイオとタッグを組んで私を守ることだったか。

この、腹の底から湧きあがる理不尽な思いはなんなのだろう。こ
う、ロレンツイオを絞め殺したくなるような・・・？

私の視線に気が付いたのか、ロレンツイオが視線をあげた。一瞬、
口の端をあげてニヤリと笑い、ミシエルに視線を戻す。糞。

まっとうでない生活 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

まっとうでない生活 2

やった！ ついに、ついにボスが認めてくれた。
渋々、という感じだったけれど。

それにしても。

思い出すと、顔が赤くなってしまう。

黒のスーツ姿のボスにハグされて、指先にキスされたただけなのに。

ちよつとだけ、アンナみたいになった気分だった。

実際は車検よろしく点検されていただけだったけれど。

「ロレンツイオ、私、ボスに認めてもらえた。好きにしていって
あ、それから、ごめんなさい。勝手にロレンツイオの書類、偽造し
て。どうしても土日に出かけたくて・・・」

家にもどり、スーツを脱ぎ、襟元を緩めてくつろいでいたロレン
ツイオは苦笑いした。

「ずっと知っていたよ。暗殺専門武道教師の老師と武器商人ブルー
のところに行っているのは」

私は心底驚いた。

「一応これでも後見人なのでね。老師もブルーもその筋では有名人
でね。そこに可愛い女の子が入りしているとなれば、嫌でも噂は
広まる。老師とブルーにコンタクトをとって、ミシエルの無事は確
認していた。ミシエル、俺はよく考えろといったはずだ。俺がミシ
エルの歳の頃にはすでに自分の運命を選択していたし、危ない橋も
渡っていた。だからミシエルがどんな道を選ぼうと否定する気はな

い」

「じゃあ、私のパートナーになってくれるの？」

「いいだろう。アンナには遠く及ばないが素質は十二分にある。サポートしてほしいならしてやる。だが、ミシエル、お前は何かしたいんだ？ ボスから暗殺の依頼がお前にくることはないだろう。最近そういう事件の処理の仕方は流行らない。ボスのそばにいたいなら尚更だ。人を殺せば極刑は当たり前だ。今は銃跡で簡単に犯人は割り出せる。お前は既にブルーの所で有名人だ。警察もバカじゃない。それとも、ボディーガードをしたいのか？ その体で？ ボスの身長をわかっていつているんだろうな？ それともこれからあと30cmでかくなってくれるのか？ それとも単純に俺の妻になりたいのか？ それなら今すぐ抱いてやる。ボスはお前に甘いが、俺はそこまで甘くない」

私はただ硬直して突っ立っていた。

ロレンツイオは私を一瞥するとソファから立ち上がった。扉が閉まる音を背中で聞いていた。

私はその日いつまでも眠れなかった。
何度も何度も寝返りをうった。

？

まっとうでない生活 2（後書き）

読んでくださって、どうもありがとうございます。

まっとうでない生活 3

「おはようミシェル。ちょっと今日でかけようか？」

気が付くとロレンツイオが部屋のカーテンを開けていた。

扉のノックの音にも気が付かずに眠っていたらしい。私はのろのろと体を起した。

泣いたせいで顔が腫れぼったい感じがするし、頭が少し痛い。

ロレンツイオは普段と変わらないおだやかな様子で窓を開け、外の冷たい空気を中に入れた。

「寒っ」

私はあわてて首元まで毛布を引っ張り上げた。

「ほら、起きて、仕度をして」

ロレンツイオはそういうと、腫れて赤くなっていると思う私の瞼にそっとキスをした。

「どこへ行くの？」

紺色のダッフルコートのボタンを留めると、ロレンツイオが毛皮でできたアンナの帽子をすっぽりとかぶせてくれた。あったかいけれど、派手な帽子。

ロレンツイオはだまっただまま、車を出した。ポンコツのフィアット。長身のロレンツイオが乗るには小さな車だ。アンナのフェラーリはあれから車庫に入ったまま一度も外に出ていない。

途中で車を止める。

「花を買おう」

そこで、私は自分たちがパパとアンナのお墓に向かっているのがわかった。

お店の店員は私よりちょっとだけ年上の女の子だった。

綺麗な黄色の花束を二つ手早く作ってくれる様子をぼんやりとみていた。

「お腹がすいた？」

そういえば、朝食を食べずに出てきた。

サンドイッチ屋では私と同じくらいの年の男の子がサンドイッチを手際よく紙にくるみ、渡してくれた。ピクルスをオマケしたからね、とウインクしてくれたけど、ピクルスはあまり好きじゃない。ハムをオマケしてほしい。でも、ありがとう、といって受け取った。私は車の中でサンドイッチを齧っていた。

ポンコツのフィアットは暖房をかけてもちつともあつたまらない。

外はさらに寒く、空は灰色に曇っていた。今にも雪が降り出しそうな天気だった。

あの時は夏で、雨が降っていた。細かい細かい雨が絶え間なく降っていた。

私とロレンツィオは手前にあつたアンナのお墓にお花を供えた。

天国のアンナ、・・・そう心の中で言いかけて、ふと、思った。人を殺していたアンナは天国にいけるのだろうか？ パパも。パパもボスに切りかかった男を殺している。私はロレンツィオを振り返った。

ロレンツィオはじつとアンナのお墓を見つめていた。冷たい冷たい石。そこにはゴージャスなアンナの破片もない。あるのは、さっきの女の子がつつんでくれた黄色のお花だけだ。

ロレンツィオはそんなに表情が豊かな方じゃない。

それでも、そこにあるのが悲しみと絶望であることはわかった。

私はすぐ隣にあるパパのお墓にお花を供える。黄色のお花のここ

るだけ、色が灯った。

死はすぐそばにばかりと口を開けてまっている。

私が死んだとき、私はパパやアンナと同じ場所にいるのだろうか？でも、いくら考えても、そこには何も無いような気がした。虚無だけが広がっていた。

私は怖くなってロレンツイオを振り返った。

ロレンツイオは、冷たい墓石を見つめていたその目でゆっくりと私をみた。

「寒くないか？」

ロレンツイオの問いに答えるように、くしゃみが出る。

ロレンツイオはかすかに目許を緩め、自分のコートの前を開けると、私をすっぽりとつつんだ。背中にはロレンツイオの温もりがあった。

長い間、ロレンツイオは私を抱きしめていてくれた。

私は思い出した。いつもパパのアキラが少し困った顔をしていたのを。パパはパパだったけれど、こうして抱きしめてくれることはなかった。パパはいつもたくさんのことを教えてくれたけれど、どこか困っていた。ママが突然死んでしまって、子供の私とどう接していたかわからず、でも、パパができる全ての事をしようとしてくれた。それが、たまたま用心棒のやり方を教えることだったのだ。笑ってしまう。子供だった私はそれを鵜呑みにして全部覚えた。

それでも、私はどうすればいいのだろうか？殺し屋にもなれず、ボディーガードにもなれず。その橋は壊れている。その先にあるのはただの崖だ、と教えられても私はわたるしかなかった。そして、その崖はすぐそこにあった。

まっとうでない生活 3 (後書き)

読んでくださってどうもありがとうございます。

壊れた橋の先 1

私はボスの傍にすることは許されたけれど、銃を携帯することは許されなかった。

ただ、綺麗な格好をして、ボスにくつついて鞆をもっていればいい、ような。

階段を降り、建物を出る。止めてある車まで少し距離がある。私はあたりを見渡した。

私は、たくさんの事件ファイルを集め、どんな場所で襲われやすいか、どんな所から狙撃されやすいか、あるいは自分だったらどこから狙うのか、どんな銃を使うのか、いつもシミュレーションしていた。だからいつも、癖のように危険個所をチェックしていた。

光が一瞬みえた。

反射、人影、距離、銃、ボス、危険、回避。

瞬時に体中全ての思考回路と神経回路がつながった。

私は渾身の力でボスをつきとばす。

「ボス、伏せて！！！」

一瞬で私は動いた。ボスの命を狙う人間がすぐ斜向かいの建物にいて銃を向けている。

射程距離にボスはいて、そいつは銃を撃つ。

重い衝撃が自分を襲った。

「ミシエル？！」

ボスの驚愕の声。

2度目は防げない、ボス逃げて、まずい、ボス、違う、私を庇うな
2発目の音

「ボス、狙いはあんだだ！」

セルジオが、私を庇って覆いかぶさろうとするボスを引きずり倒し、すべり込んだ車に押し込むのがわかった。

車・・・防弾・・・安心。

私も荷物のように車に押し込まれる。

息ができない。

苦しい。

「ミシエル、ミシエル？」

遠くで声がする。

「止血する。アレク、病院まで何分でつく？」

「10分。センター病院に向かっている」

「わかった。ミシエルがんばれ。急所は外れて・・・・・・・・」

病院の椅子にすわったまま両手を握っていた。

ミシエルは手術室に運び込まれたままだ。

夜の病院は最低限の明かりが灯されているだけで、薄暗い。

「全く、用心棒を庇おうとするなんて、本末転倒だよ」

長い沈黙を破ってセルジオが力なく笑う。

ミシエルが私をつきとばした後、2発目、3発目の銃弾からミシエルの体を庇おうとつさに私が覆いかぶさろうとしたことを言っているのだ。

「そうだな・・・」

相手は私が狙いなのだ。ミシエルを撃とうとしていた訳ではない。下手にミシエルを庇おうとしたところで、相手が私を狙うことで逆にミシエルに銃弾が当たる確率は高くなってしまふ。それどころか私を貫通した弾がミシエルに当たれば庇ったことにもならない。

それぐらい、冷静であれば瞬時に判断できたはずだ。
気が動転していた。

このところ危険らしい危険もなく油断していた。

ミシエルは瞬時に判断して私を突き飛ばした。

そして私の代わりに肩を撃たれてしまった。

目を閉じる。

どうか、神様、ミシエルをお助けください。

神に祈ったことなどない。神に祈れるほど、潔白な人生を送ってこなかった。でも、ミシエルは純真な穢れのない子だ。ミシエルの無事を祈ることぐらい許されるはずだ。

ミシエルに甘えていた。

ボスを守るといいながら、自分の周りをうるちよろしているミシエルが可愛くて仕方なかった。

ミシエルは本気だったのだ。必死だったのだ。

父も母もいなくなり、用心棒になると決めて、自分に認めてもらおうといつも必死だった。自分が当たり前のようにこの道を選んだように、ミシエルも用心棒になる以外なにも思いつけなかったのだ。

あんなに必死だったのに、何も気づいてやれなかった。

馬鹿だった。

ミシエルを命の危険にさらしながら、それを可愛いなどと呑気に構えていた自分が許せなかった。

結局自分はミシエルを手放したくないだけなのだ。

壊れた橋の先 2

ミシエル。

優しい擦れた声が耳元でして、
頭を撫でる大きな手の、覚えのある感触がして、
体は地に沈み込むように重くて、目をひらくのも面倒で。
それでも私は目を開けた。

「ミシエル」

ボスが私の枕元にへばりついていた。
シャツの襟はよれよれで、髪もぐしゃぐしゃ。
こんなボスを見たことがない。

「ボス？」

ボスが泣き笑いのような変な顔をした。
ハンサムが台無し。

「ミシエル、よかった」

ボスの声は擦れていた。

私はボスの頭を撫でようとして呻いた。
右手が動かない。

そうだ、そういえば、撃たれた。

右肩から先の感覚がない。

右肩を撃たれたのか・・・。

「ミシエル、本当によかった」
よくない。

私は右利きだ。

このまま感覚が戻らなければ、もう、用心棒として銃は撃てない

事を意味している。

「死んでしまうかと思った。よかった」

単に麻酔が効いているだけなのだろうか？

それとも・・・？

私は白い天井を睨んだまま細く息を吐いた。

「ミシエル、苦しいのか？ドクターを呼ぼうか」

「いい、大丈夫」

ボスの方をみている。

ボスを安心させようと、左腕を伸ばそうとして、呻く。

右肩をやられただけで、左腕を上げることも困難だとは。体はつながっているんだな、と奇妙なことに感心した。

「ミシエル、大丈夫か？」

私は体を動かすのをあきらめた。

「大丈夫」

ボスを安心させるために笑ってみせる。

「大丈夫だから」

涙があふれた。

全然大丈夫じゃなかった。

不安だった。

もう、用心棒としていられないかもしれないという不安。

はつきりわかった。

怖かった。

居場所がなくなることが。

私はアキラでもアンナでもロレンツィオでもなく、ただの役立たずだった。

一人ぼっちになりたくなかったのだ。

ちょっとでもいい、ボスの役にたちたかった。

泣きじゃくる私を、ボスは必至に慰めようとした。

「痛いのか？ 大丈夫か？ ドクターを」

相変わらずとんちんかんな事をいつている。

いつも、ボスとはとんちんかんだ。お父さんと呼べといたり。留学しろといたり。

ドクターを呼びに行こうとするボスを止めた。

「違うの。痛くない。行かないで。一人にしないで」

ボスは浮かしかけた腰を下ろした。

「撃たれて怖かったのか？ そうだよな。怖かったな」

違う。ボスは一生懸命頭を撫でてくれる。違うんだってば。

ほんつとくに、馬鹿じゃないの？ 撃たれるのが怖くて用心棒が務まるかっていうの。

そりゃ、……今思えばちょっと怖いけど。

怖いのは、心の拠り所となる場所がなくなること。

私は泣き続けて、ボスは慰め続けて。

「ちよっと！ 患者を疲れさせないでちょうだい。さっさと部屋から出ていきなさい」

体格のいい看護師が現れて、ボスを追い払った。

ボスはよろよろしながら出て行った。

「おきたのね。検温の時間よ。あと、点滴しようね」

看護師はほがらかな感じでいい、体温、脈拍、と私が生きていることを確認する。

「あの、腕は……弾は貫通しているんですか」

「ああ、後でドクターが説明してくれると思うけど。弾は貫通していたし、場所も悪くないみたいだよ。流れ弾が当たったんだって？怖かったね」

窓からは明るい光が差し込んでいた。

「・・・」

私は随分と遠くにいるのを感じた。

アキラやアンナの世界とも、平和な日常とも、どちらにも戻れない所で立ち尽くしている。

私は窓の外を見ていた。

明るい光の中を鳩が横切っていく。

看護婦は丸々と太った指で器用に点滴の準備をしている。

「それにしてもあんたの見舞いの人、いい男が多いわね。やたらでかいけど」

そういつて私の腕にぶつすりとは点滴の針を刺した。

痛い。撃たれておいて、今更だけど。

壊れた橋の先 2 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

壊れた橋の先 3

次に目を覚ますと、ボスが私の左手を握りしめたまま、枕元に突っ伏して眠りこけていた。変に左手を握られているせいで、左手まです痺れたような感じだ。どうしてくれるのだ。

右腕を動かそうとしたが、やはり動かない。

私はボスの間抜けな寝顔をみてちよつと笑った。意外に瞋が長い。視線をあげると、ロレンツイオが戸口にもたれたまま腕組みをしてこちらを見ているのに気が付いた。

「ロレンツイオ？」

ロレンツイオはゆっくりと歩いてくると私の方に屈みこんだ。

「ミシエル、大丈夫か？」

低く優しい声でそういうと、私の頬を撫でる。

「ロレンツイオ、ドクターに会った？」

私の問いにロレンツイオは頷いた。

「・・・右腕が動かないの。ドクターは何か言ってた？」

ロレンツイオは眉間にしわをよせ、いや、といった。

「痛むか？ 今は無理に動かそうとしたりしない方がいいと思うが」「痛むとかじゃなくて、感覚が無いの。右腕だけ。どうしよう？」

もう、銃をもてないかもしれない。もう用心棒もできないかもしれない。ボスを護れないかも・・・」

ロレンツイオは悲しい悲しい顔をして私を見下ろしていた。

まだそんなことをいつているのか その顔はそういつていた。

「ミシエル！」

でも、口をひらいたのはいつのまにか起きたボスだった。

「何をいつているんだ。もういい、もういいんだ。用心棒なんかしなくていい。銃なんかさわらなくていい。そばにいてくれればそれで・・・」

ボスは綺麗な顔を台無しにしてぼろぼろ泣いていた。大人の男の人がこんな泣くのを初めてみた。

ボスは泣きながら私の頭をなで、私にキスをした。

涙が顔にかかり、伸びかけた髭と髪がくすぐったかった。

「もういい、ミシエル、十分だ。」

ボスは泣きながら何度もキスをした。私の瞼や頬や唇に。

「ミシエルウウ」

子供みたいにボスが叫んだとき。

「ちょっと、またアンタなの？ 患者を疲れさせるなっていうたでしょ？ そのでつかいの、こいつつれて出てって！」

と、この前の看護師さんが現れ、ロレンツイオの方を向くと、アゴでボスを指した。

「了解」

でつかいの、と呼ばれたロレンツイオはそういうと、ボスの首根っこをつかむと、ずるずるとひきずりながら病室の外に出て行った。

「ドクターが診察にみえるわ」

そういつて看護師はニッコリ笑うと斜めになっていた毛布を手早く直す。

やってきた初老のドクターもやっぱりニコニコ笑っていた。

こここの病院のスタッフはみんなよく笑う。

体温よし、脈拍よし。

アンタは死にかけたんだよ？ そりゃあまだ、右腕は動かなくて当然だよ。なあに、そのうち動くようになるよ、きっと。神経？ 切れていたら？ 結ばいいさ。わっはっは。

ドクターは豪快に笑った。

笑うところじゃないと思うけど。

不安そうな私をみて、ドクターは言った。

アンタは生きている。

アンタはよく頑張ったよ。

全く無関係の、赤の他人の無責任な言葉だから、素直に聞けることもある。

アンタはよく頑張ったよ。

そうだ。私はびつくりするくらい、頑張ったのだ。

だからボスを助けることができたのだ。

そうじゃなきゃ、ボスは死んでた。

もういいよね。

これだけ頑張ったから。

護った。

ボスの役に立った。

だから、もう、いい。

私は眠りにおちた。

全てが終わった後、警察がきて簡単な事情徴収が行われた。

聴いていることは簡単だったけれど、時間ばかりかかって腹がたった。私が聴収係なら10分で終わらせる内容を1時間以上かけていた。詳しいことはセルジオなんか話してくれたらしい。私は「会社社長を狙った狙撃」の「巻き添え」をくらい、「流れ弾に当たった気の毒な人」になっていた。

それにしても、狙撃したやつが下手くそでよかった。もし、私だったら、1発目は当てられなくても、2発目か3発目はボスの頭部に確実に当てていたと思う。それに、あの距離からあの場所を狙って、撃ちそこなつて、すぐに捕まる？ 素人に毛が生えたやつの仕業とは思えない。

壊れた橋の先 3 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。
もうすぐ完結します。

休息

ミシエル、ミシエル。

病院では邪魔者リストに挙げられ、極力ミシエルから引き離されてしまった。だから、退院後はこうしてずっとそばにいる。ロレンツイオやセルジオはあきれて出て行った。

「ボス？」

ちよつと居心地悪そうにミシエルは私の膝の上にいる。

「もう、どこも痛くないか？」

ミシエルの細い体を抱きしめる。

入院中、ミシエルは随分痩せてしまった。

病院食は不味い。これは全国共通だ。病院に料理を持ち込んだら、またあの怖い看護師に怒られた。

「ちよつと！ 勝手に料理持ち込まないでくる？ 全くおいしそうだったらありやしない。今度もつてきたら、あたしが全部食べちゃうからね！！」

ぷりぷりとよく怒る看護師だ。

「大丈夫よ、ボス」

ミシエルは白い腕を私にまわす。

つい、力をいれて抱きしめ、ミシエルがけが人だったことを思い出してあわてて力を緩める。

痛くなかったかとミシエルをみると、少しはにかんだ様な表情になった。

ミシエルの可愛い鼻にキスすると、くすぐったそうに笑った。ピンク色の唇にキスすると目を閉じて甘えるように小さな口を開けた。

小さな口にゆつくりとキスする。

ミシエルの愛らしい口からはかすかに甘い声が漏れた。

しかし、ケガ人のミシエルにご無体な真似をするわけにもいかず、私はミシエルを大切に大切にベッドにしまった。

ミシエルのちょっと不満そうな顔がたまらなく可愛い。

食べてしまいたいくらい可愛いが、今は休養が必要だろう。

アキラが死んでからずっとずっと走り続けてきたミシエル。

安心して休むといい。

ミシエルはあどけない顔をしてすぐにすやすやと寝息をたてた。

それから 1

ミシエルを私の屋敷で療養させている。

もう、ミシエルを手放すのは無理だ。

ロレンツイオのもとにかえす気は毛頭ないし、どこにもやるつもりはない。

さっさと嫁にしてしまおう。

そんなときだった。ロレンツイオから呼び出されたのは。

「ちょっとそこに座れ」

いきなりロレンツイオにいわれた。

「……」

ロレンツイオは慇懃無礼なところが無いわけではないが、ボスである私に向かってそのような口をきいたことは、今までない。

「俺の可愛い娘をよくも危険なめにあわせてくれたな」

「……悪かった……」

ロレンツイオのまとう空気が凍る。

「悪いですむか。その上、手をだしたのか。俺の娘に」

「……え？……まだ、その」

「まだ？……ほう。まだ、とは？」

ロレンツイオがゆらり、と近づいてきた。

指をバキバキと鳴らして。

ロレンツイオは頼りになる男だ。だが、それはあくまでも味方であればの話で。敵にまわったロレンツイオがこれ程恐ろしいとは……。

「ミ、ミシエルと結婚させてください！！」
思わず口走っていた。

ロレンツイオが口の端をあげて微かに笑ったような気がしたが、ロレンツイオは冷たい空気をまとったまま、いった。

「ミシエルは絶対にお前には、嫁にやらん。カタギの男に嫁がせる」

・・・なんかデジャヴ？　のような気もするが、今は。

「必ず、ミシエルを幸せにする！・・・だから・・・！」

そういつてロレンツイオをみると、ニヤニヤ笑いながらあらぬ方をみている。

ロレンツイオの視線をたどると、そこには悶絶して地面をのたうつセルジオがいた。

笑いすぎて声も出ないのか、ひーひーと涙を流している。

・・・はめられた。

と、思った。が、ロレンツイオはそれなりに本気だったようで。

「ミシエルを二度と危険なめにあわせないと誓え」

と、続けた。

「誓います・・・」

「ミシエルを大切にすると誓え」

「誓います・・・」

「ミシエルを必ず守ると誓え」

「誓います・・・」

ありとあらゆることを誓った。お義父さんに。

それから 2

「リハビリ」という名目で武器商人ブルーのところに来ている。ブルーに頼めば、射撃の練習や試し撃ちなど、いつでもやらせてくれる。

「ミシエル、まだ無理しない方がいいよ。頼むから大人しくカルロさんの屋敷に戻って寝ていてくれないかなあ。ミシエルがここで射撃の練習していたなんてカルロさんにバレたら、僕が殺されるんだけど」

ブルーが困り顔でいう。

「まだちょっと痛いけれど、もう元気だし、退屈なんだもん。ボスは仕事中だし、バレないって」

ブルーをなだめ、銃を握りなおす。

まだ実弾を撃つのはちょっと無理かな。

しかし噂をすればなんとやらで。

ボスが青ざめた表情でやってきた。

「ミシエル。急にいなくならないでくれ」

おおっと。どうしてここにいるのがバレたのかな。

ボスはお仕事中のはずでは？

「ここで何をしていた？」

単なるリハビリです。エヘ。

「またこんなものを持って・・・」

ああ、私のデザートイーグルCAL・357が・・・。
銃をボスに取り上げられてしまった。

「用心棒はもう、許さない」

ボスは私を見下ろしていった。

「ハイ。美人秘書として、ボスのおそばにいます！」

用心棒だろうが秘書だろうが、そばにいれば一緒だもんね！

私はニツコリ笑ってボスを見あげた。

「会社は、クビだ」

けれど、ボスは突き放すようにそういった。

・・・クビ。

クビですか。そうですか。

この不況に突然解雇ですか。

鬼畜ですね。

・・・って、もうボスのそばにいられないってこと？

「外回りは危険だから、『秘書』はクビにする」

危険だからこそ、そばにいるのに。

ずっとボスのそばにいたいのに。

私はボスのシャツを握りしめていた。

「嫌。そばにいる」

ボスは小さくため息を落とした。

「クビにしたところでミシェルを野放しにすると、すぐ危険な事を始めるのはわかってる。ちょっと目を離れた隙にすぐこれだ。・・・

・心配だからそばにはいてもらう」

ボスはそう言って、私の頭に手を置いた。

???

そばにいてもいい。
でも用心棒はダメ。

美人秘書もクビ（もともと秘書業務なんてほとんどやってないけど）。

うーん。

どうすればいいんだろう？

うーん？

本格的に考えてみた。

「もしか、ストーカーしろ、と？」

ボスが呆れ顔になった。

「嫁になれ」

ボスがポツンといった。

嫁。

そうか、その手があつたか！

それならいつでも一緒にいられるし、ボス護り放題だもんね！

・・・って、およめさん・・・？

ボスのシャツを握りしめたまま、見あげる。

「頼むから、しばらく大人しくしている。ケガ人なんだから。それから、この前お前を撃った男を雇った奴等を何とかするまで、家を出ないでくれ」

「およめさん」

「うむ」

「ボスのおよめさん？」

「そうだ」

そういうと、ボスは顔を背けた。

おおお。

ボスの顔が赤い。

そのままボスはひよい、と私を抱き上げた。

「ブルー、邪魔したな。ミシェル、帰るぞ」

ボスのおよめさん。

すごくいい考えだ。

私はすごく嬉しくなって、ぎゅ、とボスに抱きついた。

それから

ボスが嫁になれというので、嫁になってやった！

ロレンツイオは「嫌になったらいつでもかえっておいで」と、祝福？？ してくれた。

お嫁になれば大人しくお家にいると思ったのかもしれないけれど、お生憎様。

リハビリのおかげで腕はだいぶ動くようになった。普通の射撃ならいける。ただ、反動が大きいライフルを使ったり、連射したりす

ると腕にすぐ痺れがきてしまう。でも、まあ、一撃で仕留めるから連射はあまり必要ないけれど。

ボスには内緒の話だけれど、ブルーやロレンツイオに相談したりして、警備の会社を立ち上げる準備をしている。用心棒は絶対にやるな、とボスはいうし、かといって私にできることで「合法的なこと」はあまりない。それでもボスを絶対に護ろうとしていきついた先が「警備」だった。

とりあえず、武道教師の老師のところまで友達になった人を頼りに警備会社にもぐりこんでみた。が、そこで現実の警備会社のぬるさに腹をたて、今に至る。ブルーの所と提携し、裏情報のやりとり、防犯装置なども開発し、渋い顔をするロレンツイオもまきこんで話を進めている。

最近、ボスの部下のアレクが嗅ぎ付け、興味をもったのかやたらと首をつつこんでくる。単なる警備会社じゃなくて、ヘンテコな探偵事務所のようになってしまうのでコワイ。そのうち転職するからヨロシクとかいっている。こらまで。アレクはしっかりボスのお守りをしてる。

・・・そんなわけで、今も愛するボス、じゃない、旦那様の「警備」をいろいろと画策しています・・・内緒でこっそりと！

それから 2（後書き）

完結しました。

読んでくださってどうもありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4209o/>

小さなボディーガード

2010年11月26日07時52分発行